
Fate/ stay with murder

舞月朝影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / s t a y w i t h m u r d e r

【Nコード】

N 6 5 0 8 Y

【作者名】

舞月朝影

【あらすじ】

三年間。虚月識は『』と向き合っていた。それは無と言って無と言えず、有と言って有と言えないもの。形容するならばアカシックレコード。直訳するならば――死。三年の眠りから目覚めた虚月を待っていたのは、聖杯戦争という魔術師同士の闘いだった。

「僕が、今度こそ聖杯を破壊するよ――切嗣さん」

作者「原作風に設定を小出ししていくので、原作を知っている人からしたら煩わしいかも知れません。どうかご了承下さい。」

P r o l o g u e (前 言)

Prologue

——ここは、どこだ。

僕の声が世界に反響する。けれど、周囲には何もなく、存在するものは無かった。

虚無に支配された空間。

無。

誰もいない、何も無い世界に——ただ一人、僕はぽつんと浮かんでいた。いったいいつから僕はここにいるのだろう。なぜこんなところに来たのだろう。それよりも、いったいどうやって？

何も無い世界。そこに存在するのは、よくわからない何か。暗くて、深くて、冷たくて。それは嫌悪感を抱かせるものでありながら、どこか親しみを持てるものでもあった。

——これが、死なのか？

わからない。解らない。判らない。僕には何も判別がつかず、ただ頭の中に流れこんでくる概念だけが僕の意識をつなぎとめていた。

——これは、なんだ。

——死。人々が世界にとどまれる時間を過ぎたときに、始まる、崩壊の始まり。

崩壊の終わりは――この、虚無に辿り着いた時だけだ。

十 十

「……ここは、どこだ？」

目が覚めた。見上げた天井は真っ白だった。手を動かそうとするとズキズキと痛み、体中、痛みでまったく動かせなかった。幸いにも痛みのない眼球だけを動かして周囲を見る。

僕の隣には、看護師さんがいた。彼女は横でじっと本を読んでいた。

あの、と声をだそうとしたが喉がうまく動かない。最後に声を発したのはいつのことだったか。僕には昨日のことのように思えたが、あの虚無にいた時間が解らない以上、記憶が確かであるかどうか確信はなかった。

数十秒間、じっと見ていると目が合った。どんぐりのように丸い目を見開いて、大いに驚き、詠嘆した。

「先生、先生！ 虚月>>こづき<<くんが目を覚ましました！」

彼女は本を床に放り投げて、丁度部屋に入ってきた先生に駆け寄った。先生は彼女より驚き、看護師さんと共に僕に歩み寄り、痛いところはないか、どこが悪いところはないかと聞いてきた。

「体を動かすと、全身が痛いです」と正直に言う。医者に嘘を言うても始まらない。

「そりゃ、君は運動していなかったからねえ。筋肉が剥離しかかっているのだろう。……しかし、他に悪いところはないのかい？」

医者は自分の言葉を一旦途切れさせ、僕の全身をまじまじと見る。それから、「もしないとしたらこれは奇跡だ。三年間も眠っていた少年が目覚めて何もなかったなんて前例がない！」

医者は大喜びだった。そんな嬉々とした表情を曇らせたくはなかったが、僕はどうしても聞きたくなって尋ねざるを得なかった。

「あの、……先生」

「どうしたね？ 虚月くん」

「どうして、落書きがされているんですか？」

「……………落書き？」

先生は、途端に眉を顰めた。きよろきよろと周囲を見回して、「そんなものどこにもないじゃないか」と訝しげに答えた。けれど僕にはそれが信じられなくて、言わざるを得なかった。

「だって、ほら。先生にも、看護師さんにも、壁にも、ベッドにも……線や点がたくさん書かれているじゃないですか」

見えていて、気味が悪い。こんなものをずっと見ていられない。見ていたら、僕はあの虚無の世界を思い出してしまう。今思うと、あれは濃厚な死の塊だったのだろうか。それとも、なんなのだろうか。感覚的には理解できたが、言葉に表すことができない。

それと同じだった。その「落書き」は一つ一つが脈動し、生命の躍動をありありと見せつけていた。特にその線の広がる中心である点は、命という概念を感じさせるほどだった。

医者は僕のそんな言葉を聞くと、「疲れているのだろう。今日はゆっくり休んで、明日また会おう。その時に詳しいことを聞いてあげるから」

そう言いながら、医者はゆっくりと僕から離れていった。手招きで看護師を呼び、歩きながら話をしているのが聞こえた。

「これは前例がある。確かX県の病院だったのだが、ある患者が――そうだ、彼と同じくらいの年で、同じような症状を発したんだ。その子は退院後はちゃんとやって行けているそうだが、目覚めた当初は自分で自分の目を潰そうとまでしていた。

明日、その子の対処にあたった先生に来てもらうことにしよう。幸い、私は彼女の知り合いだからね」

「……その先生の名前は、なんというのですか？」

「――蒼崎橙子という名前だよ。患者の方は、黒桐式。旧名は、両儀式だ」

P r o l o g u e (後書き)

さて、最初の説明パートは飛ばしていくよー！

Prologue second

僕が次に目覚めたときは、橙子さんが病室に入ってきた時の小さな足音が響いた時だった。いったい何年あっていないのだろうか、と思いながら上体を起こす。

今日は痛まない。なかなか回復しているじゃないか。

「おはようございます、橙子さん」

「おはよう、じゃない。……なんだ、起きられるのか。心配して損したじゃないか」

僕が起きたことに驚きながら、彼女はため息混じりに言う。

この人が僕を心配していた？ ……馬鹿な。

そう思いながら、橙子さんの表情が真剣そのものだったことに気づき、本当に心配してくれていたことが嬉しかった。最後にあったのが……僕の間では二年前だが、実際には五年も経っている。彼女にとってそれは長い時間だったのだろうか、と思いながら、足音まで覚えた彼女を見た。

とても綺麗な人だ。赤い長髪はポニーテールにされている。いつもは眼鏡をかけているのだが、今日はかけていなかった。いつもどおり、アイロンをかけたようにパリっとしているシャツにジーンズという格好で現れた橙子さんは、医者というよりもビジネスウーマ

ンに思えた。その美貌は、昔のままだった。

——その全身に、落書きされたかのような線を引かれて。

開け放たれていた病室の窓から冷たい風が入り込む。ひゅう、と音を立ててそれは僕と橙子さんの間を通り抜けた。寒いな、いいながら橙子さんは窓を閉じる。その動作をしながら、彼女は僕に「お前のその”眼”さえなんとかあったら、お前は今日中に退院できるそうだ」と言った。

「へえ、随分早いんですね。式さんは一週間位必要だったらしいですけど」

僕が口にした式という人物は、僕の従姉>>いとこ<<だ。いつも着物をきている、どこか割れ物じみた壊れやすさを感じさせる女性だ。昔は両儀という名前だったが、今では結婚して黒桐という苗字に変わっている——といっても、僕が知っているのは両儀式ではなく、黒桐式だけだが。

僕の識る両儀式という女性は、僕の従兄にあたる黒桐幹也さんから聞かされている想い出話の中の人物だ。僕が魔術などを知っているということを知ってからは、聞かされることのなかった彼女の戦いなども少しは耳にすることが出来た。

最終的に、全て惚気話に変わってしまうのだが。

「おまえは何故か知らんが筋肉が全く衰えてなかったし、寝てる間に剥離しかかっていた筋肉がもうくつつきやがったからな。医者からすれば奇跡といったところだが、まあお前の知る式の件もあるしな——私は驚かないがな」

ふふん、と彼女は鼻を鳴らす。けれどそれを言ったあとで、僕は苦笑した。

「じゃ、なんでその式さんと幹也さんを連れてきているんですか？」

僕はちらと病室の入口を見る。そこから、赤い着物の袖が覗いていた。それと、黒い外套の端が。

バレてたか、といって黒い外套の主――黒桐幹也さんが僕の前に姿を現す。以前あった時とあまり変わらない感じで、上下が黒一色の服装で統一されていた。おそらく彼は黒っぽい服しか纏わないのだろう。

「ほら、式。せっかく従弟>>いとこ<<にあっただから顔くらい見せたらいいじゃないか」

「……まあ、そうだな」

そう言って、式さんは幹也さんに手を引かれて病室に足を踏み入れた。老いを感じさせない瑞々しい純白の肌と、それと対照的な真っ黒な髪。瞳は墨を流し込んだような、美しい黒をしていた。

珍しく、赤いジャケットを着ていない。見れば今日は裏地のある、ちゃんとした着物だった。着替えだけで何分使ったのだろう。

旧知の人物と立て続けに再開すると、感動も若干薄いものとなる。だが彼らが僕のために遠路はるばる着てくれたのだと思うと自然と表情がほころんだ。けれど式さんは僕に再会の挨拶の一つもよこさずに、その黒い瞳で僕を見据えている。

「なあ、シキ。——おまえ、何が視えている？」

唐突に、彼女は言った。その言葉に掛けられた圧力を感じ、僕は医者に言ったように線と点が見えるということを話した。すると、それだけで橙子さんと幹也さんの表情が曇る。……なにか良くないのだろうか。それとも、別の原因なのだろうか。

思えば、なんの理由もなく橙子さんがこの二人を連れてきたことはない。つまり、橙子さんは僕のこの”眼”がなんなのか、検討がついているのだろう。

そしておそらく、解決策も。

「……シキ。お前が見ているのは——」

「死」と式さんの言葉を遮って僕は答えた。「あの、真っ暗な中で僕はずっとあれと向かい合ってきたからね。ああ、あの気持ちとは多分一生忘れられないよ。僕は——あそこには戻りたくないと思うながら、あそこに戻りたいと願っているんだから」

僕のこの言葉を聞くと、橙子さんと幹也さんはもっと暗い顔をした。それと対照的に、式さんは無表情のままだ。

そして、間を開けて彼女は言った。

「お前の見たものは、私の見たものと同じだ」

Prologue third

式さんは、僕にすべてを話した。

そして、僕はこの目がなんなのかを知った。

直死の魔眼。物事の終わりを見ることでできる魔眼の一つ。それの保有者は、この世界を見渡しても僕含め三人しかいないらしい。

ひとりは、僕。

ひとりは、両儀式。

ひとりは、遠野志貴。

最後のひとりは失踪して今では所在不明になっているらしいが、最後の目撃情報は倫敦でかの真祖の姫と共にいた——らしい。聖堂教会の情報だそうだ。

僕には魔術が使えないが、有名な退魔の家系に生まれたため、色んな所に名前は知れ渡っている。僕の家系はそちら側にはかなり名の知れた家である。両儀の家とはかなり昔から親戚づきあいをしているんだとか。

そして、その一人息子の跡取り。七夜に並ぶ退魔の家系なのだから、注目されて当然であった。魔術協会、聖堂教会、アトラス院：有名所はもとより、小規模な魔術結社などにも「虚月」の名前は知られていた。それで僕は蒼崎橙子さんと出会ったのだが——これ

は余談でしかない。

とにかく、式さんは眼を制御することに成功。ただそれまでは「魔眼殺し」の眼鏡を掛けていたそうだ。それも一時的で、すぐにやめたそうだが。

僕の魔眼の症状は遠野の息子よりも式さんのほうに似ているらしい。また、橙子さんの話によると「根源のどこかとラインが繋がってしまった」ということらしいが、それも含めて僕の身体的特徴は式さんに似ているのだ。血も繋がっているし、それを含めて式さんに教えを乞おうと思った。

「式さん、この眼の制御法、教えてくれますか？」

話を終えてあまり間を開けずに言葉を発した僕に対して、式さんは驚きを禁じ得無かったようだ。いつもは絶対に見せない困惑の表情を僕に向けながら、「おまえ、怖くないのか」と聞いてきた。

「怖くないと言ったら嘘ですけど、それよりも目先の問題を解決する方が先です。いい加減、この線だらけの世界にも飽き飽きしてきましたから」

「飽きた……か」

彼女はそう言うと、どこか儚げに笑った。その瞳は、慈愛に満ちたものにみえた。

まるで、同類を見るかのような――

制御法の殆どを教えてもらったが、ほとんどが感覚的なことだったので、僕は自力で制御することに決めた。

「それじゃあ私は、お前がもう退院しても大丈夫だということ saying ってくる。それまで黒桐が持っている眼鏡をつけておけ。それが魔眼殺しだ。なんならやるぞ」

いっぺんに全て言ってから、橙子さんは部屋をでた。シーツの下から足を伸ばし、ベッドから以前と変わった様子もない足を抜く。その足で、恐る恐る地面を踏む。

痛みはない。僕はすでに動ける状況にあるようだ。そんな僕を見て、「オレの時は一週間も動けなかったのに」と呟いたため、僕は苦笑を漏らさざるを得なかった。ひんやりとした床の上を裸足のまま歩き、幹也さんから眼鏡をもらい、それを掛ける。

途端、線は消えた。――ああ、これで少しの間は安心だ。そう思いながら僕はふとした疑問を彼らに言う。

「えっと、式さんと幹也さんはどこに泊まるんですか？」

「ああ、オレたちはホテルをとってある。……ま、橙子は自分でどうにかするだろう」

「っていうことは、橙子さんは泊まる場所がないんですね。今のところ」

それさえ解ればいいのだ。と思いながら僕はベッドに腰掛けた。僕の質問の真意が解らないようで、彼らは二人して首をかしげている。

た。



式さんから制御の方法を教わり終えた頃に、医者に来て言うには退院して良いそうだ。僕が当時着ていた藍染めの浴衣を受け取り、式さんと橙子さんに病室を出てもらってから着替えを済ませる。すでにひとりで着替が済ませられるほどに回復していて、案外これから先苦労はしないかもしれない、と思った。

式さんと幹也さんは病院に近いホテルだそうだから、退院してかrazuすぐに別れた。それから、橙子さんに宿を尋ねた。

「え？ ……泊めてくれないのか」

まるで当たり前のことを要求するかのようには橙子さんはいった。もとよりこちらもそのつもりだったので二つ返事で承知した。恩は恩で返すのが礼儀というものだろう。僕は橙子さんの車に乗せてもらって、三年ぶりに自分の家に向かうことになった。

三年ぶりと言っても感覚的には一日ぶりである。変化していないことを望んでいたとき、ふと橙子さんが思い出したかのように僕に笑いかけた。「それにしても、君も隅に置けないな」

「え？」

いったいなんのことを話しているのだろうか、と思い僕は間拔けた返事をする。

「見舞い客だよ。どうやら毎日来ているようだよ。名前は――なん

て言ったかな、遠坂、だったっけ」

橙子さんはハンドルを切りながら答えた。このルートだと深山町へと進行している。だんだんと見慣れた街並みになってきた。遠坂という名前を聞いて十字路を右に曲がった先にある真っ赤な屋敷を思い出しながら僕は驚愕した。

「遠坂、って遠坂凜ですか？」

「そう、その娘だ。毎日毎日、自分の時間を惜しんできているようじゃないか。なんだ、恋人か？」

「いえ、そんなわけじゃあないはずなんです、けど……」

遠坂さんには以前お世話をしたことがある。言峰教会の神父からの頼みで、僕が稽古をつけてあげたのだ。あの少女は今どうしているのだろうか、と思いながら僕は動く景色を眺めていた。

しばらくして、十字路に出た。ここから坂を登ると西洋屋敷が立ち並ぶ町並みへとなり、左へ曲がると和風の家が立ち並ぶ町並みになる。そういえば、僕の隣に住んでいた士郎君は今頃どうしているだろうか——そうすると、今まで僕に出会ってきた人物の顔が次々と思い出され、今頃どうしているのだろうかという、なんともいえない気持ちになった。

「……そういえば、識。お前、一人で暮らせるのか？」

「ああ……そういえば、両親はもういませんでしたね。まあ、経験はありませんけど……いざとなったらお隣さんに助けを求めますよ」

笑いながらそういう。土郎君は料理がとても得意で、彼の父――衛宮切嗣をいつも満足させていた。切嗣さんはが死んだのと同じ時期に僕の両親も死んだのだったと思い出した。ということは、彼が居候を連れてきていない限りあの家で今でも一人暮らしを続けているのだろう。

僕と違って人徳のある子だから大丈夫だと思うが。

「まあ、無理はするなよ。なんなら一週間位お前のところにいてやろうか。寂しいだろう？」

「大変嬉しいですけどお断りします。僕はこう見えてけだものですよ」

からかうように僕は言ったが、橙子さんは「それを承知のうえだ」ときっぱりと言った。驚いたが、明日には帰ってもらうことにした。

十　十

自宅にたどり着いたあとのことは特に何もなかった。あったとしたら、橙子さんが今晚中に帰ると言い出したくらいだ。だから僕は眼鏡を貰っていいかということ聞き、それについて承知されてからもうものの件に関してお礼を述べた。橙子さんは、「よせよせ」といって煙を払うように顔の前で手を振ったがまんざらでもなさそうだった。

そののち、橙子さんと別れ、僕は就寝した。

明日からは学校があるのだろうか、と思いながら。

直死の魔眼／？ chapter one

青年のナイフが素早く動く。対立する鬼のような大男の体に無数の切り傷が刻まれる。それに対して男は、拳に煉獄を纏わせて拳を繰り出す。それをすべて避け、目にも留まらぬ動きで辺りを高速移動し、その度に敵の体には傷がつけられる。

まるで、蜘蛛のようだと思った。

大男は、倒れない。ある時は灼熱を生み出し、ある時は青年を焰のまとった拳で殴り、——その光景は、炎鬼＞＞えんき＜＜という鬼を思い出させた。

彼らは、殺しあう。

殺し合って、殺し合って、殺し合って——

最後に、大男の腕が青年の心臓を穿つ寸前——青年のナイフが敵の頸動脈を断ち切った。

敵は、白い粒子となって散っていく。青年はそれを見ながら、悪鬼のような表情で言った。

「また消えるのか——紅赤朱、あの夜のように、オレの前から姿を消すのか！」

その叫びが響き渡ったときには、青年もあの炎鬼のように光の粒子となって消えていた。

はっ、と目が覚めた。重たい瞼をこすりながら僕は布団から抜け出し、朝食を作ろうかと思いい台所に向かう。清々しい冷気が僕の眠気を吹き飛ばしてくれたおかげで、今日一日は動き回れそうだ、と思った。小鳥の囀りを聞きながら、僕は台所に立つ。

別れ際に、式さんに渡されたナイフ。これを一体どうしようかと思いいながら台所の前に立つ。

……けれど、料理を作るやる気が起きない。よく考えたら食材がないじゃないか。溜息を付いて、士郎君のご厄介になりますかと腹を決めた。土下座でも何でもしてやろうではないか。

半ば自棄＜＞やけ＜＜になりながら、僕は自室へと戻り、制服に着替えた。穂群原高等学校の制服であるベージュ色の学ランとズボンを身にまとい僕は戸締りをし、お隣さん――衛宮士郎の家へと出かけていった。

もちろん、式さんからもらったナイフは忘れなかった。

徒歩五秒。とりあえず大きな門を叩くが、誰も出る気配がない。

「……よくよく考えたら、ここの屋敷は広すぎて誰も出るはずがないじゃないか」

笑って、僕は黙って中へと足を踏み入れた。

「わあああああああああああああああああ！　その人、避けてえええええええええええええええええっ！！」

女性特有の甲高い声が、バイクの音と共に聞こえてきた。振り向くと、そこにいるのはバイクに乗ったボーイッシュな天然教師――

「藤村先生、なにしてんですか！？」

僕は慌てて半歩下がってバイクを躲すと、すぐにそれに飛び乗った。自然、藤村先生の後ろから覆いかぶさるような格好になる。

「きゃっ！　ちょ、ちよっと君！」　「先生はちよっと黙ってて！

ブレーキが解らないんですか、アクセルを踏まないでください右折しようとしなくてください！」

僕の言葉に鬼気迫る者を感じ取ったのか先生は静かにして、アクセルから足を外してくれた。僕はブレーキを掛け、ゴムの擦れる音を響かせながら止まろうとするバイクから足を伸ばし、スパイクの踵で地面を削りながら失速の手伝いをした。

バイクが止まり、そこでようやく僕は藤村先生から身を離し、地面に足を付いた。安堵の溜息をつく。

「……藤村先生、何をしたらこうなるんですか」

「え、っと、あの、――」

「先生はいつもこうでしょう。衛宮の機械類に触るなど言ったら触るし、あいつの修理の邪魔はするかと思ったら僕の料理まで邪魔し

たりして、構って欲しいのはわかりますけれど――」

「あの！ どちらさまですかっ！」

僕の話を遮って、先生は大声を上げた。その様子に僕は驚き、もしや解っていないのだろうかと思った。昨日鏡で顔を見たが、三年前と変わったところはなかった（はずだ）。それとももしかして、もう人の事を忘れているのだろうか。

「忘れたんですか？ 貴方の大好きな弟分の、虚月識ですよ。タイガーなのに鳥頭ですか」

僕がそれを言ったときには、背後に土郎君と、もう一人誰かがいた。時刻は午前六時四十五分。土郎が起きていても不思議ではない時間帯だ。

そんなことを思っていたから、僕は藤村先生の様子が全く解っていないかった。

「――識！ もう、死んだかと思ってたじゃない――！」

先程の三倍ほどの声を上げて、先生は僕に飛びついた。ジャンピング抱きつきである。あまりにも唐突で全体重をこちらにかけてきたため、僕は為す術も無く藤村先生に押し倒される。ぐっ、とうめき声を漏らしたが、先生の耳には届かない。

「三年よ三年！ もう、あの事故で倒れたあと、私がどれだけ心配したと思ってるのよ！」

「あの、せんせ――」

「いいわ、タイガー扱いも許す！ ええーい酒持ってこーい！ 識が帰ってきたぞーっ！！！！」

まず落ち着いてくれ。僕はそう思いながら、僕を見下ろしている士郎君を見る。その件の士郎君は僕に頬擦りまでしている藤村先生の様子にあっけに取られた様子もなく、ただ僕を見つめていた。隣に立つ紫髪の少女も同様である。

「――識兄>>シキにいく！？ いつ退院したんだよ！」

「士郎くん頼む、こいつどけて！」

藤村先生に押し倒された状態の僕を見て目を丸くする彼に、僕は必死の思いで頼み込んだ。

直死の魔眼／？ chapter one（後書き）

ご都合主義っぽいなー。
下手だね、どうも。

直死の魔眼／？ chapter two

僕の復帰は三人に歓迎された。紫髪の少女――間桐桜とも面識のある僕は、衛宮ファミリィ（僕命名）に認定されているようだった。朝食を貰いたいと言ったら是非と元気のいい返答をされ、そのままVIP待遇を受けた。いつにもなく、三人がハイテンションである。

さて、料理を待つ間何をしようか……

僕は少し考え、藤村先生――いや、藤ねえといったほうがいいだろう。藤ねえと想い出話に耽ることにした。

「それにしてもさ、藤ねえ」

「んゝなにになに？ 私は今とっても気分がイイから何でも聞いてあげる。特に識の話はね」

「最後に藤ねえが僕にキスをしたのは僕が小学六年生の頃だったよね」

「なっ！？ なななな、なんで覚えてるの！？」

僕は爆笑した。

台所からは、士郎が吹き出す音が聞こえた。

藤ねえの顔からは、湯気が立っていた。

あの時の思い出は忘れようにも忘れられない。酔っ払った虎は手

に負えないと思い知った時である。その後自分の行ったことに対する羞恥で、一週間ほど僕と顔を合わせることもできなかったんだか。

「僕はいろいろ覚えてるよ。……それにしてもどうしよう、今日、学校あるの?」

「話題の転換が早いわねえ。まああるわよ。識は私のクラスだから、実質転校生みたいな扱いになるかもね。HRで自己紹介でもする?」

「うん。……高校三年生までの勉強、終わらせておいてよかったあ」

「あー……そのことは当時、驚いたわ。もともと高認とって大学に行くつもりだったんでしょう?」

「まね。けど、中学校の間に高校二年までしか終わらなかったから諦めた。あと一ヶ月あればなあ」

「識、本当に頭いいわよねえ。……こりゃ、今までの内申を一気にいいものにすることができるかもね。識なら」

「テストで満点を取ればモーマンタイ。簡単だよ」

簡単っていった人、はじめて見たわと藤ねえはテーブルに突っ伏していった。上目遣いで、頬杖をついている僕を見上げて、

「……よっし、先生と一緒に学校に行きましょう!」

「いや、士郎君と行くからいいよ」「いいえ、貴方は私と来るんです。色々あるんだからねー手

伝ってもらおうわよ」

藤ねえは、とても張り切っていた。こりゃ歓迎パーティーでも開かれるかもな、と思いながら僕は運ばれてくる料理に期待した。

十
十

とりあえず、僕が学校に登校してから下校に到るまで、僕は様々な人物と再会を果たした。柳洞一成、美綴綾子、穂群原三人組、…旧知の後輩が同級生というのも変な感じだが、年上として認識されているだけまだいいだろう。

しかしそれでも、遠坂凜には出会えなかった。

……そう、出会えなかったのだが僕は今、彼女と出会っている。

たまたまだ。下校しようと鞆をとって、廊下に出たら彼女がいた。

視線が合う。彼女は息を吞んで、僕の復帰に驚いていた。それが他の人物の驚き方とは違う、安堵の混じったものでもあり、しかし若干恐怖を含んだものでもあることはすぐに見抜けた。初め僕なんと声をかけたらいいか解らなかったが、取り敢えず声を掛けることにした。

「……久しぶり」

夕焼けに照らされる廊下。

「……お、お久しぶり、です——虚月先輩」

「凜ちゃん。お見舞い、ありがとう」

「え？」

僕は彼女に向かって微笑んで、また明日と手を振った。下駄箱では土郎君が待っていることだろう。僕は急ぎ足になりつつあったが、彼女の「待って！」という叫びによってその歩みを止められた。

「どうしたの？」振り返ると、遠坂凜はどこか不安を持った表情で僕を見ている。

「わ、私を——許してくれるんですか？」

「……許すも何も、君は何か悪いことをしたのかい？」

僕がそう言うと、彼女は驚愕して僕を見る。「覚えてないなら——いいんです。思い出さなくて」彼女は懇願するように言った。夕焼けに照らされていても、彼女の顔は暗かった。彼女がそこまで言うのだったら思い出してほしくない何かなのだろう。それならば、思い出さない方がいい——そう思いながら、僕は改めてまたね、と声をかけて立ち去った。

直死の魔眼／？ chapter three

その日のその後にあった出来事は特に無かった。ただ単に、僕は自宅へ帰ると通帳と財布を持ってきて自分の財産を確認するため、また生活費を確保するために銀行へと向かったくらいだ。

商店街に行くと、会う人会う人が驚きの表情を見せながら、僕に色々な言葉を投げかけた。慰みの言葉や、励ましの言葉。その他にも色々あったが、彼らは昔のままに僕を受け入れた。

今日の晩ご飯は魚料理だひゃっほい、とテンションを上げながら僕は帰路につき、その日は晩ご飯を食べて、寝た。その次の日もほとんど同じルーチンで、土郎の家に行き、学校に行き、食材を買い、寝る。その間に僕は過去の僕の友人らと再開し復縁していった。みんなは僕が驚くほど昔のままに接してくれたのがとても嬉しかった。

それが数日続いて――

僕が目覚めてから六日後のことだった。商店街で魚屋のおじさんに値段交渉をして、二百円値切ることに成功し魚を買った直後に土郎がやってきた。彼の両手にはパンパンになったビニル袋が提げられている。僕はそれを一瞥して土郎に視線を向けた。

「やあ」

「よう」と土郎は愛想のいい笑顔で答えた。「識兄も買出し？」

「まあそんなところだね。……にしても大漁だなあ」

僕は彼の持っている食材を詰め込んだビニル袋を見ていった。士郎は微笑を浮かべ、返事をする。

「よく食べる虎ふじねえがいるからな。識兄もくる？」

「うーん、どうしようか」

顎に手を当てて、悩む。食材は冷蔵庫に入れておけば安心だが、世話になるというのもどこか気が引ける。

僕は――敢えてここは帰る足に任せて晩ご飯をごちそうになることにした。折角のお誘いなことから、乗らなきゃ損と思いながら僕は首肯し、彼の家へと向かった。

その日の晩ご飯は大いに盛り上がった。久しぶりに藤ねえと士郎と共にする食事はいつもより美味しく感じた。桜ちゃんは僕に大盛りのご飯を注いでくれて、どうやって食べようかと僕の頭を悩ませてくれた。それに比べて僕よりも多めにつがれたご飯をモノの数分で平らげ、「おかわり！」と元気よく桜ちゃんに要求する。

そんな光景を士郎と共に笑いながら僕は見ていた。

と、ぱくぱくと料理を口に運んでいた士郎がふと思い出したように声をかけた。

「なあ、識兄」

「ん？」

「これから、どうするんだ？」

質問の真意がわからないが、取り敢えず答えることにした。

「家に帰って、それから寝て……明日は学校にいくだけかな。いや、明日は休みか。ならどうするかなあ……」

ふんふん、と士郎は熱心に話を聞く。やけに食いつきがいいな、と思いながら僕は日常の生活ルーチンを話した。すると彼はううむ、とお坊さんのように唸ると、

「なあ、ここに住めば色々手間が省けないか？」

「あー……確かにそうかもね。良い提案かもしれない。僕が一人暮らしして変に無駄遣いするよりも、監督してくれる人がいたほうがいい。……勿論、二人は自宅からここにきてるんだよね？」

「ああ、そうだよ」

士郎から返事がきた。桜ちゃんは朝からこっちに來ているらしくて、なんとまあ健気なこと。邪魔しちゃう悪いとは思うが、他人より自分、不便より便利。

「それなら、確かに一緒に住んだほうがいいね」

かくして、僕はこの家に居候することになった。僕が士郎から聞いた、生まれて初めてのわがままでもあったし、嬉しくもあった。

藤ねえも、藤村大河という教師の立場で了承してくれたが、ただ

一人桜ちゃんだけが反対した。決まったときには小声で「もしものことがあったら……」と言って顔を赤らめていたが、あれはどのような意味なのだろうか。まさか何か想像しているのか、と思いながら僕は後輩の女子（いかがわしい妄想が大好きな子だ）を思い出す。……うん、桜ちゃんはそんな子じゃないと僕は信じている。

僕は士郎くん部屋を一つ貸してもらった。そこは切嗣さんの部屋だった。

「まだ何も手をつけてないから親父の荷物だらけだけど、勘弁してくれ」

他に部屋はありそうだが僕がここを指定した。それだというのに謝ってくる士郎君はとても律儀だ、と思う。その律儀くんに僕は「こっちのほうがりやすいからなにより」と返事をして、おやすみ、とあいさつを済ませた。既に隣の部屋から僕が持っている武器や礼装は持ってきていたため、魔術師の工房である部屋を使えることは僕にとって幸運だった。

だが、そこで少し疑問が湧いた。――自身の父親の部屋が、一種の魔術工房化していることを彼は知らないのか？

あの様子だと、その通りだ。

「教えなかったのか」

あの人らしいや、と僕は思った。敷いてあった布団に入り、ぼくは深い眠りについた。

真夜中に目が覚めた。なぜかは解らない。が、僕は危険を察知した獣のように目を覚まし、足の思うままに道を歩いていった。暗い道を、僕はゆっくりと歩く。まとわりつく闇を払うように、僕はナイフを握った手を振るう。

数々の血を吸ってきた――わけでもないが、ただ一人の男を殺めたこの白刃を、僕はお守りのように持ち歩いている。それは、いつでも敵に狙われてもいいように、という心境からと、願掛けめいた、「これを持っていれば大丈夫」ということからだ。

それとも、僕は――虚月識は、敵を求めているのだろうか。

解らない。

わからない。

果たして、敵はそこにいた。「それ」そのものは敵ではなかったが、それに付き添っている大男は、僕の敵だ。

「――久しぶりだね、イリヤスフィール。切嗣さんへの憎悪はなくなったかい？」

「三年ぶりね、シキ。キリツグへの恨みの代わりにあなたに対する憎悪なら以前の倍になったわよ」

純白のような少女――イリヤスフィール・フォン・アインツベル

ンは僕にそういう。確かに恨むのも無理もない。それまで切嗣を殺すという憎悪だけを頼りに生きてきた少女にとっては、衛宮切嗣という男が最後までイリヤスフィールという実の娘を愛していたという真実は酷だったかもしれない。そうしたほうが、純粹な殺意だけで生きてこれたのだから。

彼女の表情は、以前よりも大人びていた。成長した様子はないものの、内面的な成長はとても大きかったようだ。僕は彼女の浮かべる、朧月のような淡い微笑を見ながら、ナイフを鞘から抜いた。

「――僕は聖杯戦争には関係ないはずだが」

「あら、気づいてないの？ 貴方の右腕――聖痕>>ステイグマ<<が刻まれてるわよ。マスター候補を殺すことはマスターの当たり前の行動でもあるし、貴方を殺すことは私の悲願になりつつあるの」

純白の隣に立つ、岩石のような大男が白い吐息を出す。雰囲気同様の褐色肌に彩られたその肉体は、腰に巻かれた布で秘部を隠されているだけでほかは裸だ。そして……その右手には、岩を削りとっただけの大剣が握られていた。

「やっちゃえ、バーサーカー」

斧としても使えそうなその剣を構えて、その大男は咆哮した。

「さあ――殺し合おう」

僕は、歓喜してそういった。

直死の魔眼／？ chapter four

虚月識の両目が紅く輝く。その瞳は伝承に伝わるそれ——直死の魔眼そのものだ。月光に照らされたそのナイフは本来の持ち主よりも、現在の持ち主に似合って見えた。藍染めの浴衣に似た、動きやすそうな服装をした彼は時代錯誤にもほどがあるだろう。

だが、そのことはどうでもいいこととして扱われる。その佇まいは一種の神秘性を放ち、まるで遙か高みにいる『何か』のような性質を醸し出していた。

それが、少女には気に食わない。霊格として識を圧倒的に上回るバーサーカー——英霊を使役していながらも、彼女が彼を恐れる点はそのにある。

相手が誰であろうとも、気にせず殺しに来る。彼が戦闘を行うときに思考されるのは敵をどのように解体＞＞ころ＞＞くすことだけである。

その彼が直死の魔眼という最凶の魔眼を持っていることを先日知った彼女は、あまり時間はかけられないことを判断した。

聖杯戦争が本格的に始まる前に、バーサーカーの『十二の試練＞＞ゴッドハンド＜＜』を司＞＞つかさど＜＜くる「点」を突かれあえなく敗退するわけにはいかない。それではアハト翁への面子が立たないというものだ。

そして、イリヤスフィールは識が少なからず魔術回路を持っていることを察知していた。下手をすれば何かの要因で戦闘中に召喚が

行われるかもしれない。

そうなれば、この男が最優と言われる「セイバー」のランクを持ったサーヴァントを呼び出すことは眼に見えていた。それほどまで強力な人物であると、彼女は疑わなかった。事実、彼女との前回の邂逅において彼は、彼女に会うためだけにアインツベルン家の総本山を叩きに來たのだから。

そして、立ちふさがる敵を全て屠り、彼女に会ったのだ。それが彼女には信じられないことでもあったが、識の能力を裏付けするにはそれだけでも十分だろう。

「■■■■■■■■———！！」

バーサーカーが叫び、識に突進する。その速度は音速に達するかと思えるほどだった。識に肉薄したバーサーカーは、横薙ぎに大剣を振るう。

だが、それはいとも簡単に回避された。識の表情には笑みさえ浮かべられている。それが、彼が以前よりも強くなっていることをはっきりさせていた。

サーヴァントというのは人間とは全く違う存在だ。本来なら触れることのできない霊体である。そして、その正体は生前、伝説になるほどの功績を上げた『英雄』だ。そしてそれは聖杯戦争の要となる聖杯のバックアップを受け、生前よりも強化されて召喚される。

このバーサーカーは全サーヴァントの中でも最強と言える力を持っている。ただでさえ圧倒的な戦力を、『狂化』によってさらに凶悪なものにしている。理性を奪うことにより本来よりも能力を底上

げするというものだ。

本来これは弱いサーヴァントに使われるものだが、アインツベルン——始まりの御三家と言われる聖杯戦争の古参の一つは、それを最強と言える存在に使用した。

その力は圧倒的。

それを上回る速度を見せた”人間”は、迷わずバーサーカーの右腕に走る『線』を断ち切った。そしてそのカウンターとして、バーサーカーの左拳を受けることになる。

けれど、その拳さえも識は躲した。

振るわれた正拳に飛び乗って、彼はそのまま左手の先の線も断つ。

一秒の間に、彼はバーサーカーの両手の機能を停止させた。

「——■■■■！」

切り落とされた左手と右腕。バーサーカーはそれを痛がる様子もなく、強烈な頭突きを識に浴びせた。それを防御したが、それだけで識の左腕は碎けた。だが左手一本の代償に命が助かるのだから良い、と識は判断する。

碎けた腕からは血が吹き出している。自らの軌跡が魔法陣を描いていることに識は気付くことはなかった。イリヤスフィールでさえ気付くことができなかったのだから魔術師でもない彼が気付くことができるはずはない。

「――断ち切る！」

瞬間、識の姿は消えた。そして、白刃が煌めきバーサーカーの首筋を斬りつけ、通りすぎる。ザザザザ、と大きな音を立てて彼はブレーキをかける。目に映らない速度で彼は駆け抜け、そして、また駆けた。あまりにも直線的な攻撃は、しかしバーサーカーでさえ捉えることはできない。

業の壺。虚月の一族に伝わる業の一つ。七夜の体術に似ているとも言われるが、それを圧倒的に上回るほどの速度、威力を持つ。

蒼い閃光は何度も何度もバーサーカーを斬りつける。その間にもバーサーカーの両腕は回復していくが、回復していく合間合間に別の部分の”死”を断ち切られる。

その姿は、人間。

その刃は、神速。

月光すらも翻弄していた彼は、単純なスタミナをセーブする為にその攻撃をやめた。既にバーサーカーの武器は捨て置かれている。それを使う分だけ自らの速度が敵に劣っていくことを彼ははその本能で読み取っていたためだ。そのことを思い、識はバーサーカーの手が自分に伸びる前に距離を取れると確信していた。

だが、その一瞬の静止を狙って、バーサーカーはその両手を伸ばし――捉える。

万力のような握力に耐えるために、識は歯をくいしばる。どちらかの手が使えばよかったのだが、残念なことにすべての機能を止

められていた。骨がみしみしと音を立て、識は顔を歪める。バーサーカーは彼を、地面に叩きつけた。

ぐちゃり、という音と共に彼はたたきつけられた。それでもなお生きていることがイリヤスフィールにも、彼自身にも驚きだった。

「――ああ、お前はオレを満たしてくれるんだな。

なんて幸運だ。オレは目覚めてからすぐに、戦える――！

みたせ、みたせ、みたせ（閉じよ、閉じよ、閉じよ）――我が欲望を、我が殺戮衝動を、我が全てを満たせ！

ここに契約しよう。――オレは、お前を犯>>ころ<<す。その肉片までむしゃぶりついてやろうじゃないか」

そして、魔法陣は起動した。識は自分の言葉が聖杯戦争のサーヴァント召喚の言葉になるとは思ってもいなかった。だが、この現状を打破するにはそれが一番確実であるということさえ、彼にとってそれは幸運であった。それに対して、イリヤスフィールは己の失敗に表情を歪める。

まさか、このようなタイミングで、しかも偶然呼び出されるとは思いもしていなかった。即座にバーサーカーに攻撃させようかと思っただけには、もう遅かった。

――あたりに立ち込める煙の中から、芒、とした輪郭が浮かび上がった。希薄なそれはだんだんと濃くなっていき――識の前に立った。

「オレを呼び出したのはお前か？」

それは、とても現代風の格好をしていた。服装は紺色の学生服の上に真っ黒な外套を羽織っている。あまりにも不釣り合なその格好をした青年の両手には黒い棒が握られていた。そして、それには七つ夜という銘が刻まれていた。棒に銘が刻まれていることに違和感を覚えた識は、それが飛び出しナイフだということに気がついた。

「もしもそうならば、初めまして、我が麗しきマスター。
しがない殺人貴をご指名頂き、どうもありがとうございます」

演技じみた、仰々しい動作で彼は深々と頭を垂れる。そして、その顔を上げた。

――その青い双眸は、欄＜＞らん＜＞と輝いていた。

それは、識の真逆。

「そして、純白の人外と古代の英雄よ。

――ようこそ、蜘蛛の糸で作られた惨殺空間へ」

彼は、薄く笑みを浮かべた。

直死の魔眼／？ chapter four（後書き）

【クラス】

バーサーカー

【マスター】

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

【性別】

男性

【身長・体重】

253cm・311kg

【属性】

混沌・狂

【真名】

不明

【筋力】

A+

【魔力】

A

【耐久】

A

【幸運】

B

【敏捷】

A

【宝具】

A

【クラススキル】

狂化…B

理性を代償として能力を強化する、バーサーカーを特徴付けるクラス別能力。ランクBなので、大半の理性を失う代わりに全ての能力値が上昇している。

【保有スキル】

戦闘続行 …A

心眼（偽） …B

勇猛 …A+

神性 …A

直死の魔眼／？ chapter five

彼はそう宣言し、同時に――姿が消えた。

「――！？」

バーサーカーは慌てて辺りを見回す。だが、どこにも見えない。だが、どこかから、小さな風切り音が聞こえている。そして、それが大きくなり――バーサーカーの腕を切り落とした。

「■■■■■■――！！？」

巨大な石斧を振り回し、飛び回る小蠅を振り払おうとする。だが、柔らかい動きでマードーはそれを悉く回避し、あろうことかその先端に飛び乗った。

「閃鞘・八穿^{せんさ はっせん}」

次に視認できたときには、マードーはバーサーカーの頭上にいた。そして、右手のナイフで彼の左目を突き刺す。そして、それを起点にして半回転し、バーサーカーの巨体に踵を打ち込む。そして、もう片方のナイフで狂戦士の右目を穿った。

そして、蜥蜴のようにバーサーカーの体に張り付いた彼は、最後に右足で木の幹のような首を蹴り飛ばし、その衝撃で彼から離れる。勿論、深々と突き刺さったナイフは同時に抜けていた。

「■■■■■■――！！！！！！」

激痛に、バーサーカーは絶叫する。そして、恐らく近くにいるであろう敵を攻撃するために石斧を振るう。

しかし、それは全て無駄。

Bランク以下の攻撃が通らないバーサーカーに、大きな傷を負わせた。それは聖杯戦争序盤では大きな痛手となる。マードーは相手が激昂したことを確認すると、追撃はせずに、小出しの攻撃で相手を翻弄することにした。

イリヤスフィールは敵をマスターしかもち得ない『眼』でみていた。相手のサーヴァントのスキルやステータスを表すその数値を見て、彼女は驚いた。

「マードー……殺人鬼？」

クラス名は、マードー。

イレギュラーサーヴァントとして、この青年は召喚されていた。持っている武器は日本の退魔一族『七夜』が用いた武器だということとは読み取れたが、それ以外の能力が彼のステータスからは読み取れなかった。

否、あるといえばひとつだけある。

「蒼の浄眼に、直死の魔眼ですって？」

そんな、神秘の二重保持者は聞いたことがない。そもそも直死の魔眼を持っている者たちは全て生きているはずだ。そして、浄眼を持っている七夜の一族は既に滅びている。その矛盾を解釈するため、イリヤスフィールはすぐに一つの仮説を立てた。

「まさか――七夜一族の生き残り？」

その言葉を耳聴く聞きつけ、バーサーカーに小さな傷を負わせていたマーダーは足を止め、識の近くまで後退する。

「ご名答といったところか。純白の人外。……いや、人造人間＞＜ホムンクルス＜＜か？ 瞳の色からしてそうだろう。そもそも、オレの眼で見れないものはない」

そう言うと、彼は自らの両目を指して言った。

「この両目、オレは一度壊していてね。知り合いに頼んで、壊れたオレの眼を修復できる眼を持ち出して、それを使って修復し――オレは両目を取り戻したのさ。まあ、おかげで死まで見れるようになったちまったんだがね。

邪魔で仕方ないよ、この線は。

それで？ これ以上お預けを食らって黙っていられるような”狗”じゃないぜ、オレは」

気だるげに話しながら、彼は逆手に構えた飛び出しナイフをクルクルと回す。敵に引く気がないことを読み取ったイリヤスフィールは、二人の『直死』持ちに出会ったことを僥倖と思いながら撤退を決めることにしたようで、小さく溜息をつくと、七夜に言う。

「残念だけど、これ以上のダンスは遠慮しておくわ。今日は準備不足もあったし、はじめからサーヴァントと交戦するつもりはなかったから。

じゃあね、シキお兄ちゃん」

そう言うと、イリヤスフィールは「戻りなさい、バーサーカー」と回復しきった狂犬を呼び戻す。彼はイリヤスフィールをその大きな手で優しく抱えると、瞬時に姿を消した。それから少しの間響いていた、象が地面を蹴り、走るような音はすぐに聞こえなくなった。

「まったく、呼び出しの方法が雑なマスターだ。守護者としての契約を果たした後、無茶な方法で呼び出されたのは数しれないけど、唐突すぎるのはいただけないな」

バーサーカーの気配が察知できなくなってから、マーダーは刃を収納し、ナイフを仕舞った。その動作があまりにも速すぎて、識にはナイフがひとりでに消えたようにしか見えなかった。

識はほう、と感嘆してからナイフをしまう。それから彼は答えた。

「そう言われても僕はお前がなんなのかよく解っていないし、なぜ出てきたのか全く見当がつかない」

「それじゃ、ただの縁えにしだと思えばいいさ」

「ただの」縁、か。——そうだったらどれだけいいことか」

マーダーの言葉に、識は首を傾げた。

直死の魔眼／？ chapter five（後書き）

【クラス】 マーダー

【マスター】 虚月識

【性別】 男性

【身長・体重】 173 cm・60 kg

【属性】 中立・悪

【武装】 短刀日本

【筋力】 C 【魔力】 E

【耐久】 D 【幸運】 B+

【敏捷】 A++ 【宝具】 ？？？

【クラス別能力】

狂化…D

殺人鬼を特徴付けるスキル。彼の場合殺人鬼と言うよりも「殺人貴」なので、ランクは低い。しかし、一部の能力値の上昇はある。

気配遮断…B

アサシンのサーヴァントではないため、本来ならばランクは低いが、七夜の生き残りということも相まってランクBとなっている。任意型ではなく常時発動型のため、余程神経を集中していなければ、並のサーヴァントでは戦闘中でも何度もマーダーの姿を見失うだろう。

【保有スキル】

・心眼（偽）・（真）…B

虫の知らせや第六課に属するもので、天性の才能による危機予知

能力（前者）、また、経験に裏付けされた予測による危機回避。どちらも持つ彼は、並のサーヴァントでは傷ひとつ付けられない。

・宗和の心得…C++

同じ相手に同じ技を何度仕掛けても、命中精度が下がらない特殊技能。気配遮断のスキルと相まって、高い効果を発揮している。

・投擲（短刀）…C++

このランクになると、弾丸並の速度での投擲が可能となる。

・直死の魔眼・浄眼…EX

本来ならばどちらも先天性のもので、両方を持つことは不可能だが、特殊な方法で手に入れている。

浄眼は、今は亡き日本の退魔一族「七夜」だけが持つことが出来た人外・霊体を見る・触れる事ができる特殊技能。強いものになると未来視の域になり、敵の行動がある程度予測できるようになる。

直死の魔眼は、モノの死を視ることができるという未来視の一種。それを物理的な方法でなぞりながら断つことによって、それを真の意味で「殺す」事ができる。殺された箇所の再生は不可能。点を突くと、突いたもののそのものを「殺す」。識の持っているものとは違い、己の理解している範囲内での死しか見ることができない。しかしサーヴァントになっているため、万物の死が見れるようになっていく。現在確認されている保有者は三名だけだが……？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6508y/>

Fate/ stay with murder

2011年11月25日20時58分発行